



伊藤 俊洋 自己紹介

北里環境科学センター 名誉顧問

2022年10月1日

はじめに

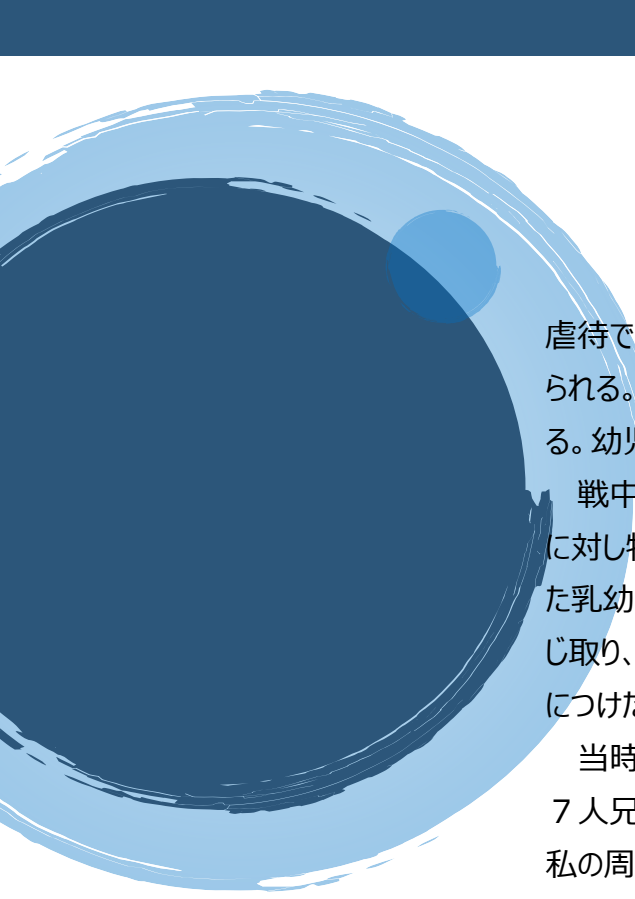
Life Crossing のご好意により、「自己紹介」の場を提供して頂いたので、「我が80年の人生に悔いなし」と題して、私の半生を紹介する。

先ず、私は、すべての人間は、宇宙で唯一無二の尊厳を持つ存在であると考えている。そこで、私自身、機会あるごとに、そのことを意識して行動するように努めている。

幼少期

私は、1941年12月1日に山梨県の笛吹市御坂町(東八代郡旧錦生村)で生まれた。太平洋戦争・ハワイ真珠湾攻撃の始まる1週間前のことであった。3歳8ヶ月で終戦を迎えるが、戦争の記憶は全く無い。だが、おそらく、私の深層心理には、戦時中の社会の精神構造が拭いようもない形で深く静かに沈み込んでいるように思う。

ヒトの子は、生まれておよそ1年で二足歩行となり、言葉を話すようになる。この時期に、すでに相手の心を読んで、上手に立ち回ることを覚える。2歳、3歳と歳を重ねるに連れて、親、兄弟、周辺の人たちと意思の疎通を重ねながら、愛情、怨念、誇り、挫折、友好、支配欲、優越感、劣等感、恥辱心など様々なストレスの中で、挫折と復活を繰り返しながら人間としての感性を磨いてゆく。生まれてから3歳までに経験したことは覚えていないが、その人の深層心理に岩盤のように蓄積して、その後の行動に強く影響する。私は、子供の教育で最も大切な時期は3歳までだと思っている。親はもとより、大人はこの時期の子供に溢れるような愛情を注ぎ込みながら、できるだけ社会性を身につけさせ、そのためには敢えて社会の荒波に触れさせることも大切であると思う。幼少期を、蝶よ花よと愛情だけで育てられると、厳しい環境に置かれた時の対処の仕方に限界が生じ、道を外すことになる。この時期の手抜きは絶対に許されない。近年、手抜き・



虐待で育てられた子供が、社会の負の連鎖に落ち込んでゆく例が見受けられる。言うまでもなく3歳以降の教育は更に大切で、なお一層難しくなる。幼児教育は近代社会の最大の課題の1つである。

戦中から戦後の混乱期は、国が存亡の危機にあり、国全体が乳幼児に対し特段に気を配るゆとりはなかった。戦中から戦後の混乱期に生まれた乳幼児たちは、ほって置かれるままに大人の真剣に生きる様子を敏感に感じ取り、社会の様子をじっくりと観察し、自分達の生き伸びる力を自然と身につけたのではないかと思う。

当時の日本の家族構成そのままに、私は姉4人、兄1人、妹1人の7人兄弟姉妹の喧騒の中で、戦中・戦後の混乱期を過ごした。当時、私の周辺には、幼稚園や保育園はなく、もっぱら、親・兄弟の保護のもとに幼少期を過ごした。

小学校時代

私は、6歳で地元の錦生小学校に入学した。1歳年上には成績優秀な兄がいて、勉強嫌いな私は、幼い頃から何かと学業の面倒をこの兄に見て貰っていた。

私が初めて宇宙というものを意識したのは、小学校3年生のある夏の日のことであった。その日、兄は私に、とても難しい質問をした。「としひろ、おまんがな、このままずっと西のほうへ行くと、どこへ行くとと思う」と言うのである。私は、その時、まだ地球というものの存在を知らなかった。4年生の兄は、学校で習った最新の知識を、弟の私に伝えようとしたのである。


このままずっと西へ行ったら海になって、海の手先はどうなるのだろう。滝になるのかなあ。滝の手先はどうなるのだろう。滝の水は何処へ落ちて行くのだろう。色々考えたけれど、全然考えは纏まらなかった。こんな難しい問題に答はあるのだろうかと思い悩んでいると、数日後、兄は答を教えてくれた。「としひろ、おまんがな、このまま西の方へ行くと、しまいには、東の方から、ここへ戻ってくるのだぞ」というのである。長い思考の時間を経て、地球というものの存在を知った時の感動は、それまでの人生では経験したことのない、言わば私にとって人生で最初の原体験のような強烈なインパクトを心の底に残した。なんてことだ。私は平らな地面の上にはいたのではなく、大きな丸い

中学校時代

私が住んでいた錦生村は、甲府盆地の東側の御坂山塊の麓に位置していた。錦生小学校を卒業すると、隣の花鳥村の児童と合併して峡東中学校で学ぶことになっていた。中学生になると生徒数がほぼ倍増し、個性の豊かな子供が多くなり、目の前が広がり、世界が開けてきた。年に2回ほど映画観賞の時間があって、アンケートに、当時、社会現象を引き起こしていた「太陽の季節」をリクエストして、先生に叱られた覚えがある。当時の新聞広告には、成人映画との記載があった。生徒活動は、新聞部と卓球部で青春を体験した。

3年生になり、いよいよ自分の将来を考える時期になった。両親は、私の将来に対して特に注文はなく、健康で好きなことをして人生が送れば良いと考えて呉れていた。当時、卒業後の就職が良いことが理由で、甲府工業高校に人気があり、競争率も高かった。私は早く自立して自分の人生を始めたいと思ったので、甲府工業高校への入学を目指して1日体験入学をした。機械や電気の実習室、土木工学の重機の見学など様々な体験をした。その時、私の心の中にワクワクするものが湧いてこなかったことをいまも覚えている。難関校であったので、自分には合格できないかも知れないという不安もあったと思う。試験に失敗したら、東京に出てどこかの企業に就職をしようとも考えた。将来のことで日々悩んでいた時、大きな転機が訪れた。映画鑑賞の日に、学校から地域の映画館まで徒歩で移動した。その時は、三々五々好きな友達や先生とおしゃべりしながら移動するのである。日頃、敬愛していた英語担当の今村栄先生に将来のことを相談した。

先生「伊藤くん、今そんなに悩んでいるなら、急いで自分の将来を決めることはないよ、石和高校の普通科なら間違いなく合格できるし、そこで勉強すれば大学へゆくことも可能だし、奨学金制度というのがあるよ」と助言をして下さった。私はその時、自分が大学へゆくことは全く考えていなかった。目の前のことで、頭がいっぱいで大きな視野で物事が見えていなかったのである。考えが行き詰まった時、大きく視野を変えることの大切さを、この時も身をもって経験す



ることとなった。この時は狭い穴倉に閉じこもり、宇宙から自分を見ることを怠っていたのである。私は、高校入試で冒険をすることなく、安全牌の石和高校普通科へ進学した。

高等学校時代

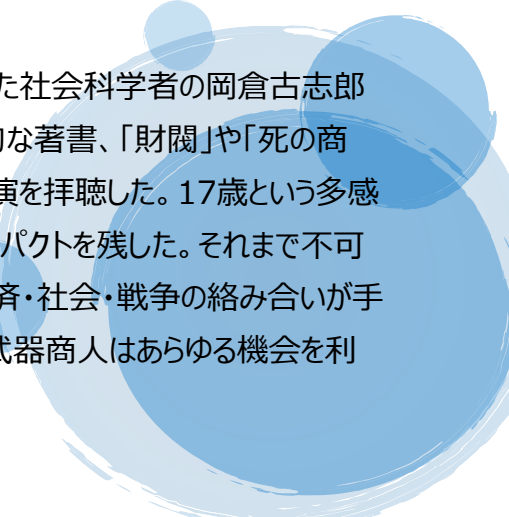
当時の石和高校は、峡東中学校、石和中学校、英中学校、八代中学校、仲道中学校など、甲府盆地の東部地区が学域であった。広い地域から集まっているので、生徒の潜在的能力には計り知れないものを感じた。見るからに頭の良さそうな人、眩しく輝いている人、何を考えているのかわからない不可解な人、などなど、今までとは桁違いに世界が広がってきた。

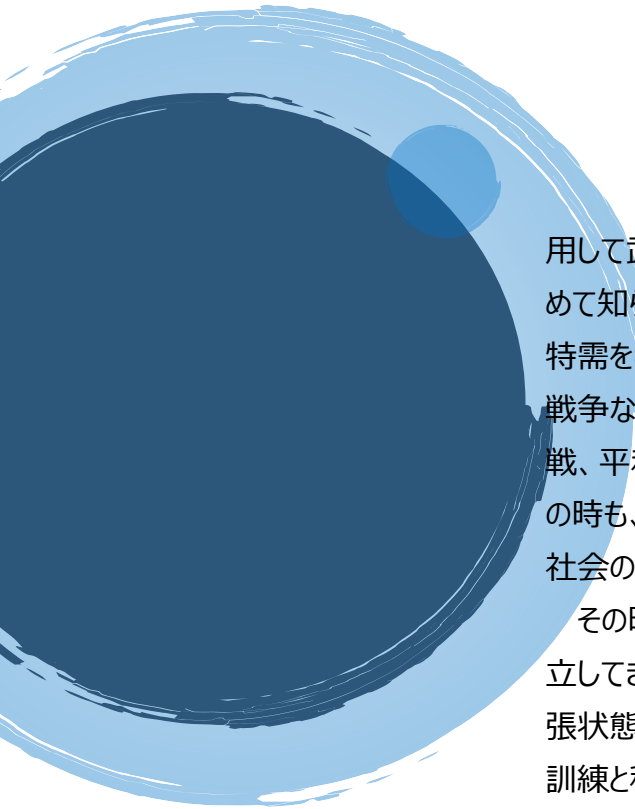
高校に入って驚いたことは、ほとんどの生徒が大学受験を目指して勉強していたのである。担任の先生は、開口一番、これからの3年間は受験勉強一筋で、総ては志望の大学に合格してから大学生活を楽しみなさい、というものであった。勉強の妨げになるものは極力排除するようにと教えられた。そして、私は生涯初めて、勉強というものに真剣に立ち向かうこととなった。私はその時、東大が何かも知らなかった。東の大学かと思っていたら、入試では最難関の東京大学のことだったのだ。

クラブ活動も禁止と言われたが、当時、石和高校が発行していた「和髙新聞」は、毎年、県下の高校新聞コンテストでグランプリを獲得する名門クラブであった。私は中学時代も新聞部に籍を置いていたので、迷うことなく新聞部に入部し、学校の広報活動に加わった。

石和高校には、年に一回全校の生徒が一堂に会して講演を聞く「石和講演会」と言うのがあった。当時、新聞部の顧問をされていた社会科担当の松野隆先生は校内でも信望のある人格者で、講演会の世話人をされていた。当然、新聞部は後援会のホストクラブでもあったので、広報活動に懸命であった。

講師は、当時社会的に注目を集めていた社会学者の岡倉古志郎氏であった。新聞部では、岡倉氏の代表的な著書、「財閥」や「死の商人」などを輪読し、万全の準備を整えて講演を拝聴した。17歳という多感な時期に聴いた話は、私の心に強烈なインパクトを残した。それまで不可解であった世の中のカラクリ、特に政治・経済・社会・戦争の絡み合いが手に取るように理解できた。戦争を仕掛ける武器商人はあらゆる機会を利



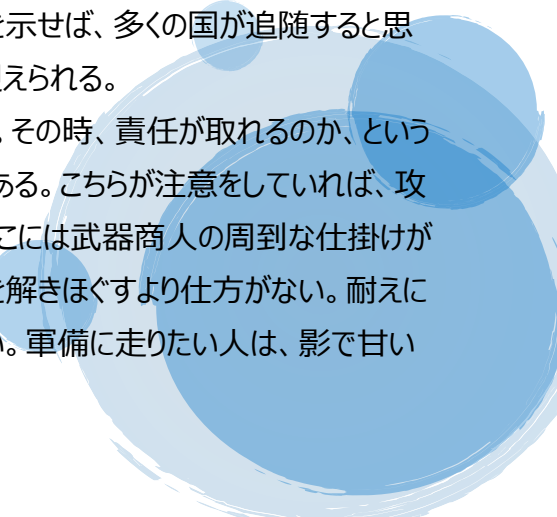



用して武器を売りつける。世の中が平和になると困る人たちがいることを初めて知らされたのである。そこには複雑なカラクリがあって、回り回って戦争の特需を我々自身が享受することもあるということだった。それ以来、正義の戦争なんて存在しないし、軍備で国が防衛できるとも思っていない。反戦、平和主義を主張するだけでは事態は変わらないことも理解できた。この時も、知らず知らずのうちに宇宙から地球を見ながら、入り組んだ人間社会の混沌の行く末をクールに見ていたように思う。

その時に得た知識や考え方が土台になって、私の世界情勢の見方が確立してきたのだと思う。例えば、軍備に関する見方を紹介すると、世界が緊張状態にあると、国は軍備を増強し、平和が続くと、武器商人は、軍事訓練と称して古くなった武器を海中や砂漠に捨てさせる。最近の中東の例では、一旦、紛争が起こると威嚇射撃と称して、古くなったトマホークを敵地の被害が出ないところに100発も打ち込む。すると、相手側は迎撃作戦と称して200発のミサイルで迎え撃つ。両者ともにほとんど被害は受けず紛争は治った。最初から被害の出ないところで旧型兵器を処分しているのである。武器商人に取ってはめでたしめでたしであるが、地球の環境は凄まじく破壊されている。トマホークの性能はさらに向上し、兵器の値段はさらに跳ね上がる。

地球上では、常に政情が不安定な地帯で小競り合いが起こる。武器商人の出番である。武器商人が力を持っている限りこの世の中で戦争は無くならない。武器商人の財源は、回り回って票になり、権力に変わり、支配力に変わってゆく。我々自身が武器商人の片棒を担っているかもしれないという複雑な世界である。イージスアショアとか潜水艦型イージス艦などというものは、実戦になったら全く役に立たない。国防は、兵器でなく、知恵と外交で上手に行うべきである。防衛費は小規模で良く、国家予算は、基礎研究、医学・環境の研究、社会保障などの充実のために使うべきである。平和国家のモデルとして日本が範を示せば、多くの国が追随すると思う。少なくとも、尊敬に値する国として迎えられる。

もし相手が攻めて来たらどうするのだ。その時、責任が取れるのか、という論旨は、武器商人が使う常套手段である。こちらが注意をしていれば、攻めてくる筈はない。もし攻めて来たら、そこには武器商人の周到な仕掛けがあるからである。私たちは、その仕掛けを解きほぐすより仕方がない。耐えに耐えて、安易に軍備に走ってはならない。軍備に走りたくない人は、影で甘い





汁を吸っているに違いない。少なくとも、私は、そちら側に付く積りはない。

私の同学年に池谷隆君という県下でも屈指の豪速球投手がいた。石和高校は、私たちが三年生の春の甲子園選抜高校野球大会に出場した。石和高校が甲子園に出たのは後にも先にもこの年だけである。対戦相手は京都の平安高校で、初戦敗退であった。池谷君を囲んで、現在もクラス会を開いている。思い出深い青春の一コマである。

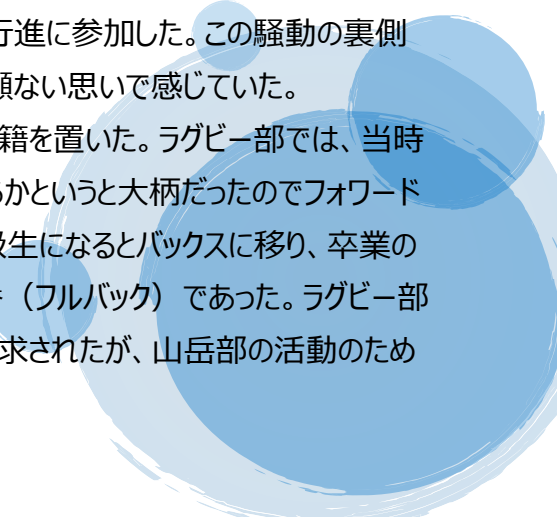
岡倉古志郎氏の講演会から40年後、私は、1998年に母校で恒例の「石和講演会」に招待された。体育館に集まった800人の高校生を前にして、「科学から空想へ、空想から科学へ」というテーマで、宇宙生命哲学の話をした。私にとって、人生最良の1日であった。

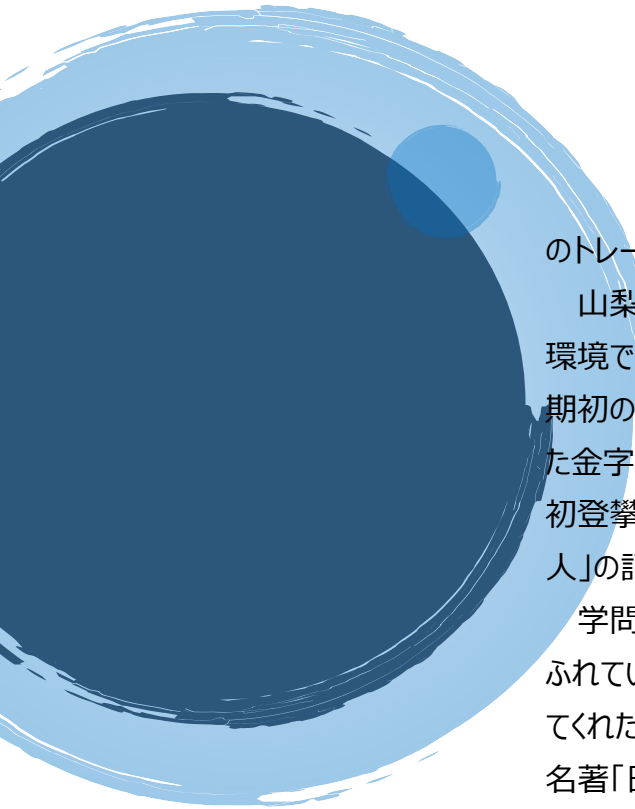
大学時代

私は1960年に石和高校を卒業し、地元の山梨大学工学部発酵生産学科に入学した、当時注目を集めていた微生物を利用した化合物の生産性と工業への応用について学ぶ機会を得た。山梨県は伝統的なぶどうの産地で、地場産業としてワイン醸造が盛んであった。発酵生産学科は、当時の地域起こしの切り札として、1957年に山梨大学に開設された新しい学科であった。微生物が秘める限りない可能性に胸をときめかせながら山梨大学の門をくぐった。

1960年といえば、日本国中が第一次安保闘争で揺れ動いた年である。入学当初からキャンパス内は反対運動が渦巻いており、臨時休校と討論集会が繰り返された。学籍番号が2番であったため、討論会の司会をさせられたり、いわゆる活動家と言われる人達とも馴染みになった。世の中のカラクリは、ある程度わかっていたので、我を忘れて運動にのめり込むことはなかった。東大生の樺美智子さんが犠牲になった翌日には、甲府から国会議事堂迄貸切バスを連ねてデモ行進に参加した。この騒動の裏側で、大きな金が動いていることを、遣る瀬ない思いで感じていた。

山梨大学ではラグビー部と山岳部に籍を置いた。ラグビー部では、当時では身長が178センチメートルで、どちらかというが大柄だったのでフォワードのロックというポジションを任された。上級生になるとバックスに移り、卒業の時の背番号は五郎丸選手と同じ15番（フルバック）であった。ラグビー部の活動は、肉体的にハードな練習を要求されたが、山岳部の活動のため





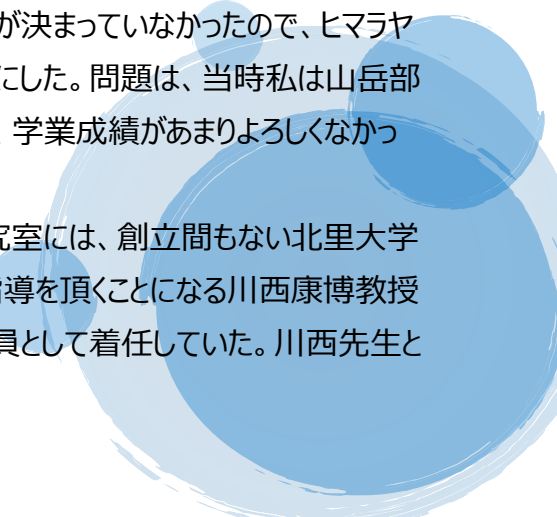
のトレーニングと考え、4年間続けた。


山梨大学の山岳部は、南アルプスのお膝元という地理的にも恵まれた環境で、多くの先輩たちが輝かしい記録を打ち立てていた。例えば、厳冬期の南アルプス全山縦走は、山梨大学山岳会が1950年代に果たした金字塔である。私の所属した時代には、4年生の時に厳冬期の赤石沢初登攀という記録を残すことができた。この記録は、当時の山岳雑誌「岳人」の記録速報にも掲載されており、青春の思い出である。

学問的には、発酵生産学科が発足4年目であり、新鮮な雰囲気にあふれていて、東京地区からも多くの個性豊かな教授陣が応援に駆けつけてくれた。記憶に残っているのは、故坂口謹一郎博士（東大名誉教授、名著「日本の酒」の著者）や、株式会社龍角散前社長の故藤井康男博士である。藤井先生は薬品会社の社長を勤めながら、年に何日か集中講義で山梨大学に来られた。藤井先生は、実に多彩な能力を持ち合わせたスーパーマンで、会社経営は当然のこととして、際立った音楽的なセンスも持ち合わせて、会社の中に社員が演奏者を務めるオーケストラを持ち、定期演奏会を開催し、本格的なLPレコードも出されていた。ご本人はピアノを弾かれ、指揮棒も振っておられた。多くの薬に関する本や、人間社会における機微にまつわる書籍も出版されていた。藤井先生は、テレビの人気番組にも定期的に出演された。故竹村健一さんがホストの「文化フォーラム」のメンバーの一人で、故堺屋太一さん、故渡部昇一さん、牛尾治朗さんなどと共演されていた。これらの一騎当千の論客を相手に、藤井先生は、持ち前の生物科学者としての豊富な知識を基に、軽快に生命科学の世界を披露されていた。

学生時代に藤井先生と飲む機会があった。龍角散の龍は、恐竜の竜で、恐竜の骨を細かく粉にして薬にしているという。近いうちに、中国のヒマラヤ地区に恐竜の骨を収集するための遠征隊を出すので、もしよければ来ないかとお言葉であった。まだ就職先が決まっていなかったため、ヒマラヤ遠征に惹きつけられて龍角散へゆくことにした。問題は、当時私は山岳部とラグビー部の活動に夢中になっていて、学業成績があまりよしくなかった。

私が卒業研究のために所属した研究室には、創立間もない北里大学から、その後私の生涯の恩師としてご指導を頂くことになる川西康博教授（現北里大学名誉教授）が兼任教員として着任していた。川西先生と





藤井先生は親友で、私の将来についても心を砕いてくださり、龍角散へゆく前に北里大学で2年間任期制の助手を務めた後に、龍角散へ就職する手はずとなった。

1963年の4月、私が山梨大学の4年生の春に、大村智先生（2015年、ノーベル医学・生理学賞受賞）が発酵生産学科の教員として山梨大学に着任された。

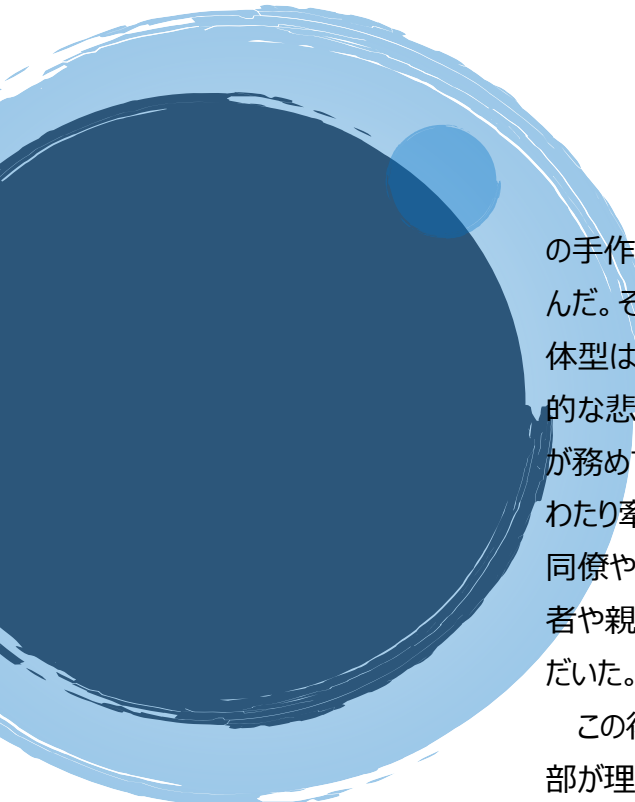
北里大学時代

1964年の4月、例の東京オリンピックの年に、私は、晴れて北里大学の助手として教員の道を歩み始めた。北里大学は、1962年に、北里研究所創立50周年を記念して創立されたばかりの衛生学部単一学部大学であった。北里大学は、64年に新たに薬学部を、66年に畜産学部を新設し、生命科学系総合大学への道を進むことになった。1965年の4月には、大村智先生が山梨大学から北里研究所に転職され、私は、1年ぶりに白金の地で再会することとなった。大村先生と研究をご一緒したことはないが、この時から現在に至るまで様々な形で、人生の先輩としての教えを戴いている。

任期の2年はあっという間に過ぎ、川西先生からは、龍角散へ移るか、北里に残るか自分の判断で決めるように言い渡された。藤井先生への恩義や、ヒマラヤ遠征への想いも強くあったが、「宇宙」、「生命」、「精神」への距離感は北里大学が近いと感じ、北里大学にお世話になることに決断した。

北里大学に就職して3年目の暮れに2歳年下の原田佑子と結婚した。佑子は北里大学の1期生で、大学を卒業した後、東京医科歯科大学歯学部助手をしていた。私たちは、2人とも大学卒で、大学院は出ておらず、科学論文もまだ1報も書けていなかった。側から見ればまことに不安定な身分であったが、私たちは働きながら研究をして、論文を書き、学位を取って、一人前の研究者になることを心に決めていて、それは必ずできるものと確信していた。

私たちの結婚に対して、両家ともに全く反対はなく、自己の責任でしっかりやってみなさいとの許可を得た。社会に出てまだ日が浅く、蓄えもなかったので、全て安上がりに済ませようと考えた。結婚披露宴の式場は、目黒区の区民会館で、会館使用料は終日3000円だった。会費制（500円）



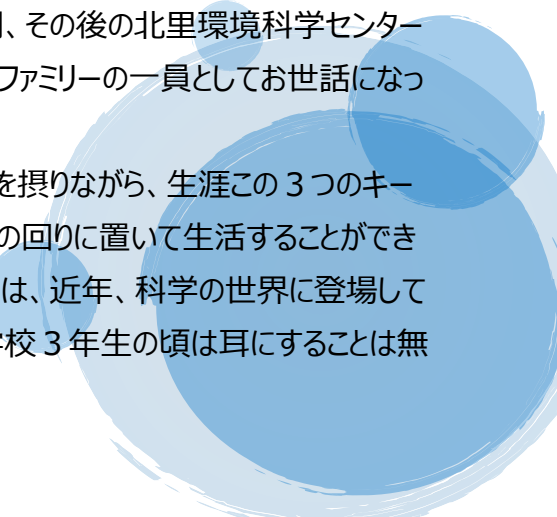
の手作り結婚披露宴にした。出席者が100名弱で、経費は20万円で済んだ。その時購入したダブルの礼服は53年経った今も愛用している。私の体型はそれ以来全く変わっていない。私たちはまだ蓄えがなかったが、経済的な悲壮感は全くなかった。媒酌人は、学長の故沼田岳二先生ご夫妻が務めて下さった。その後、大学の理事長・学長として北里大学を長年にわたり牽引された故長木大三先生もお祝いに駆けつけてくださった。恩師、同僚や友達が手作りイベントに前向きに協力してくださった。後日、関係者や親戚から、手作り感の雰囲気がとても良かったとお褒めの言葉をいただいた。

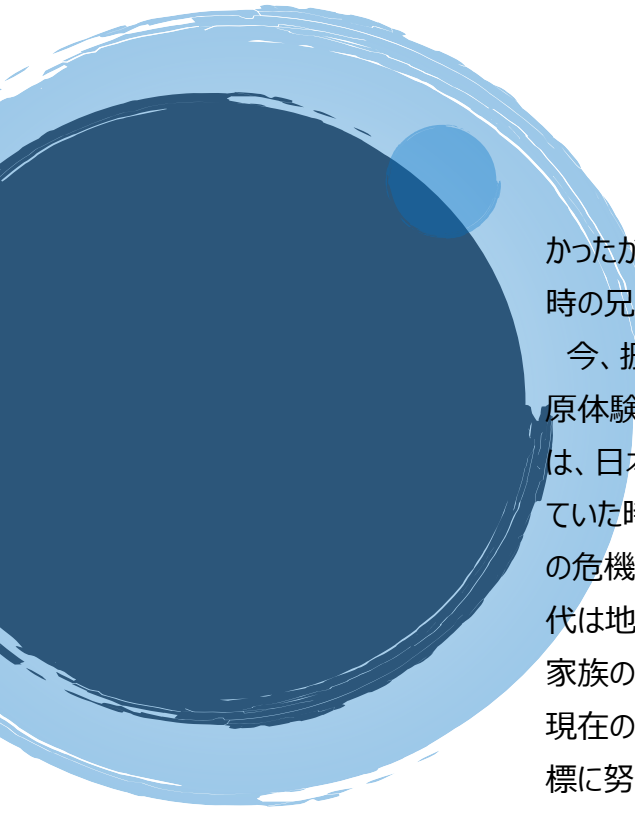
この後、北里大学は、医学部、水産学部、看護学部、さらに衛生学部が理学部と医療衛生学部に変更され、大学は新学部創立ラッシュとなった。そのことを見越して、1968年に教養部（後に一般教育部と改称）が相模原キャンパスに設立された。私は1968年に教養部の化学教室に移籍し、生涯の恩師となる故金子弘先生のもとで新たな研究生活に入った。佑子も東京医科歯科大学を辞して慶應義塾大学医学部分子生物学教室の故渡辺格教授のもとで研究を始めた。二人ともゼロからの再出発であったが、それまでの研究者になるための予備トレーニングに手応えを感じていたので、新しい研究を始めるにあたって、些かの不安もなかった。

佑子は、当時、渡辺研究室で世界的な研究をされていた故春名一郎博士のもとで、RNAレプリカーゼの仕事をさせて戴き、5年ほどで医学博士の学位を取得した。私は、金子先生のもとでの5年ほどの研究で、酵母の膜脂質に発見された新しいリン脂質の構造と機能についての論文が名古屋大学で認められ、農学博士の学位を得た。学位が取れると、これからは自立して研究ができるという一種の開放感のようなものを手にすることができる。今まではいわば無免許運転のようなもので、やっとライセンスが取れて、自分の判断でどこへでもドライブできるという開放感である。

65歳で定年退職するまでの43年間、その後の北里環境科学センターでの12年間を合わせて55年間を北里ファミリーの一員としてお世話になった。

幸運にも、大学の教員になり、教鞭を握りながら、生涯この3つのキーワード、「宇宙」、「生命」、「精神」を身の回りに置いて生活することができた。アストロバイオロジーという学術用語は、近年、科学の世界に登場してきたNASAによる造語であり、私が小学校3年生の頃は耳にすることは無





かったが、私が宇宙生物学に関心を持つようになったのは、小学3年生の時の兄との「地球問答」であったことに間違いはない。

今、振り返ってみると、小学3年生の時に一歳年上の兄から与えられた原体験が、私の人生の多くの期間に多大な影響を与えている。その時代は、日本が、焼け野原から懸命に立ち上がろうと、国を挙げて復興に燃えていた時代であった。戦後70年の年月を経て、日本は見事に国家存亡の危機を乗り越えて、いわば経済天国のような国を作り上げた。我々の世代は地獄から天国への階段を駆け上がる時代に遭遇した。自分のため、家族のため、社会のために懸命に働くことが当たり前の時代であったのだ。現在の全てが混沌として複雑な環境に生まれた子供達は、人生で何を目標に努力すべきか分らずに、途方に暮れてしまう場面も散見される。現在の日本の子供達は、ある種の極限環境（物質的に恵まれすぎた環境）で悪戦苦闘しているようにも思われる。この現象は、子供たちだけでなく、大人にとっても共通する現象かもしれない。我々は、正に、天国と地獄が混在する稀に見る困難な時代に生きているのかもしれない。しかし、「宇宙生命哲学」的に見ると、日本という国は、人類の歴史上、最も恵まれた国の1つであると言えるだろう。

学位を取得した後の米国・イエール大学での研究生活、北里大学での教授としての教育・研究活動、日本油化学会の会長としての学会活動、地域でのボランティア活動、大学定年後の一般財団法人北里環境科学センター理事長としての法人運営など、人生の後半部分については、別の機会に紹介したい。

